

紀要第十二輯の発刊に寄せて

向坊 長英

本学が紀要創刊号を出したのは昭和二十七年七月のことであった。光陰箭の如く爾来早くも七カ年の星霜が経過し、紀要もここに第十二輯を教うるに到った。一口に第十二輯といっても、それは決して容易な業ではなかった。その背後には執筆者の努力、編輯氏の労苦並々ならぬものがあつた。ここに改めて謝意を表すると共に、お互に今日の盛況を慶祝したい気持ちで正直なところ胸が一杯である。

元來紀要は本学所屬の教員が各々その専門の分野に於て日夜研鑽し、その研究の内容成果を發表し、それは同時に研究の方法、態度、精神の發表でも亦ある。対外的に發表して斯界に幾分の寄与貢獻をなすと共に、また世の批判検討を期待するものである。善意と愛情をもつてお互に打ちつ打たれつ、精進と努力を励まし助け合うものだと心得ている。従つて紀要は俗界の綜合雑誌と異つて面白くもなく、所謂リーダーダブルなものではないが、學問に生きるものにとつては、これも止むを得ないことだと觀念している。

紀要第十二輯には筆者も日頃考へていることを一つ發表しようと思つていたが、去る七月中旬日本私立短期大学協会の推薦と私学研修福祉会の助成によつて急に八十余日世界教育事情の視察に向向くことになつて了つた。何分この短期間に十七カ国を訪れようと欲張つたため、その準備が大変であつた。ヴィザ一つ貰うにも殆ど一日に一國しか貰えず、一日に二つ貰へたのは僅かに米合衆國とイスラエルの場合のみで、アラブ共和國の如きは三日を要したような始末であつた。明日に出發を控へ忽々の間に文を綴り紀要第十二輯發刊の辭に代へさせて貰う次第である。